

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	林 生海
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
唐宋敦煌民間信仰研究			
論文審査担当者			
主 査	教授 荒見 泰史		
審査委員	教授 三木 直大		
審査委員	教授 小川 泰生		
審査委員	白須 淨眞 (安楽寺住職)		
〔論文審査の要旨〕			
<p>申請論文は、敦煌文献を中心資料とした唐宋時代の民間信仰の研究である。その視点として、中国の信仰の基礎に漢語、漢字による理解があること、外来の信仰を受容する時に漢語的理解によりもとからの信仰との間に混乱が起こること、そして王朝権力など社会上層の目論見と民間信仰との力関係により信仰上の理解が変更されていくこと、といった点に着目しているところに特徴がある。申請者はそうした視点により (1) 敦煌の山岳信仰と仏教、そして政治体制、(2) 浄土信仰に見られる阿弥陀変相「大聖変」と「帰去来」の融合、(3) 敦煌講唱文学に見られる三夷教の中国社会への滲透の状況、(4) 敦煌文献に見られる言霊信仰、の四つの課題に取り組み、四章により唐宋時代の民間信仰を論じた。</p> <p>本論の第一章から第四章を各章毎にまとめると以下のとおりである。</p> <p>第一章 金山国の背景に見られる敦煌の山岳信仰</p> <p>唐末五代時期に敦煌に金山国が建てられた背景に、金山信仰という山岳信仰があったことを論じている。敦煌一帯に見られる山岳信仰は、原始的な自然崇拝として古来見られるもので、西王母信仰などに起源を求めることができる。申請者はそうした視点から分析を始め、帰義軍節度使政権が多民族多宗教の同地域をまとめるためにこの金山信仰を利用したものであることを論じ、変遷する政治情勢と信仰が深いかかわりを持っていたことを論じた。</p> <p>第二章 「帰去来」から「大聖変」へ—唐宋時代浄土信仰の一側面—</p> <p>唐宋時代に流行した「帰去来」という用語について検討した。陶淵明の「帰去来の辞」はよく知られた作品であるが、敦煌文献や同時代の伝世文献にも様々な「帰去来」と題する句が歌われ、中でも浄土讃として法会で歌われていくようになることはたいへん興味深い事例である。こうした状況を検討しつつ、仏教が中国文化と融合し、道教的な理想郷が浄土世界と重ねられて流布していくという、中国における浄土信仰流行の一過程を明らかにした。</p> <p>第三章 敦煌写本「降魔変文」より見た三夷教の要素</p> <p>「降魔変文」は、祇園精舎をめぐる舍利弗と外道の方術比べとして知られる物語であるが、ここに描写される外道が、会昌の法難で弾圧された景教、マニ教、祆教のいわゆる三夷教の修</p>			

行者である可能性と、民間における三夷教の流布、そして仏教との混同の状況を論じた。敦煌の「降魔変相」という絵巻に見られる獅牛対戦図や、外道の人物描写にも三夷教の特徴が確かに見られており、こうしたところから外来の三夷教がこの時代までには民間層にまで仏教と融合しつつ浸透し、変文という娯楽的語り物にも登場していた状況が明らかにされた。

第四章 敦煌文献に見られる言霊信仰

言霊信仰とは、もと日本語の概念であり、日本文化中の特色の一つとされてきた。しかし、同様の観点から中国古代の文献を調査すると、中国にも早くからこのような信仰があったと考えて良い。本章では、日本の言霊という概念を借りて、敦煌文献に見られる言霊信仰について論じた。

審査の結果、本論文は、以下の点で評価された。

(一) 中国唐代の研究ではこれまであまり用いられなかった山岳信仰などの概念を用いて分析することにより、当時の中国の信仰の状況がより明らかになるのと同時に、同時代の日本の状況との比較が容易になったこと。

(二) 三夷教が、広い社会層で仏教と融合しながら存在し続け、多角的な宗教社会を形作る一要素となっていたなど、これまであまり研究が進んでいなかった当時の信仰の状況を論じたこと。

(三) 膨大な国内外の先行研究を収集整理しつつ、新資料を多く用いて論を展開したこと。

(四) 難解な一次資料を丹念に読み込み、資料を整理、研究した上で論を展開していること。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。